

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第471号 平成25年1月11日

指導死

「指導死」という言葉を聞いたことがありますか。

この「指導死」というのは、教師に叱られたり体罰を受けたりしたことがきっかけで、子どもが自殺してしまう事をいいます。

私は、この言葉を聞いたとき、教師が子ども達の為に一生懸命指導し、それが原因で子どもが自殺してしまうという事はあってはなりませんし、もし、本当にその様な事があるとすれば、指導に当たった教師はもとより、子ども達にとっても余りにも救い難い事だと感じたところです。

最近では親から叱れた経験がないという子どもも少なくなく、この為、教師が少し厳しく指導すると落ち込んでしまうケースもあるので、教師の方も叱り方が難しいという話も聞きます。こうした事もあって、私はこれまで、「指導死」という言葉が独り歩きすると、教師が萎縮して厳しい指導を手控えるという事が起きはしないか、懸念しておりました。

しかし、大阪市立桜宮高校バスケットボール部主将の男子生徒が昨年12月、顧問の男性教師から体罰を受け自殺した事件は、「指導死」が特殊な問題ではなく、何処にでも起こり得る深刻な問題である事を如実に示しています。更に申し上げれば、大阪市教育委員会や学校の対応の拙さには目も当てられず、不信感が増幅するばかりです。

桜宮高校については、以前から体罰についての情報がもたらされていたにもかかわらず適切に処理されず、結果、最悪の事態を招いてしまいました。

2011年9月、大阪市に対し桜宮高校の体罰に関する情報があり、市の教育委員会を通じて調査を行っています。学校では運動部顧問から聞き取り調査をしたが、生徒に対しては調査をしないまま「体罰はなかった」と教育委員会に報告し、同教委はその報告を鵜呑みにして、何らの対応もとっていません。

また、昨年12月、男子生徒が自殺した直後の27日に、男女のバスケットボール部員に体罰についてのアンケート調査をしたにもかかわらず、結果の分析を怠り、半月間も放置したままでした。

市の教育委員会や学校側の、こうした一連の対応を見ると、実態の把握に及び腰で、真に問題解決を図ろうという姿勢は感じられません。

大津の事件以来、教育委員会不要論が声高に叫ばれるようになっており、今後こうした議論に一層拍車がかかるものと思いますが、止むを得ない仕儀といえましょう。

問題の教師は、1994年に桜宮高校に採用され、バスケットボール部の顧問として指導に当たってきました。彼は、同校のバスケットボール部をこの5年で3度もインターハイに出場させるなど、指導力には定評があり、2012年度には16歳以下の男子日本チームのアシスタントコーチに選ばれています。

このように熱血漢で指導力があり、かつ、実績を上げている顧問に対しては、学校内部はもとより保護者もものがいえない、そんな空気があったのではないかと察せられます。

また、この教師自身、周りから高い評価を受ける中で、驕りがあり、自分を見失ってしまったのではないかと。特に、勝利至上主義に陥って、一番大事な事、即ち教育の一環として部活動の指導をしているのだという事を忘れてしまったのではないかと考えています。

それにしても、男子生徒の自殺という最悪の事態を防ぐ事は出来なかったのでしょうか。

少なくとも、2011年の調査の際、しっかりと実態把握し、適切に対応していれば、今回の悲劇は避けられた筈です。

また、自殺の前夜、男子生徒は母親に「試合に負け、殴られた」と話しているといえます。また、顔は叩かれて腫れ上がっていたとの事ですが、その時、母と子はどのような会話をしたのでしょうか。恐らく、それ以前にも、家族の方は体罰の存在を認識していたのではないのでしょうか。にもかかわらず、体罰に有効な手を打てなかったのは何故なのか。この機会に、体罰の実態だけではなく、そうした一連の経緯についても徹底的に解明して欲しいと思います。

なお、体罰については、北海道においても決してゆるがせに出来ない問題です。北海道教育委員会の発表によると、昨年度は16名（平成22年度は27名）の教師が体罰により懲戒処分を受けています。私は、こうした数字とは別に、表には見えていない体罰が潜んでいるのではないかと心配しています。各教育委員会、各学校においては、今回の問題を他山の石として、しっかりと自分の足下を見つめ直して欲しいと思います。（塾頭：吉田 洋一）